

Title	外国語教師一年目の試み : ポルトガル語
Author(s)	有水, 博
Citation	大阪外国語大学学報. 59 p.75-p.84
Issue Date	1982-11-08
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80921
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

外国語教師一年目の試み (ポルトガル語)

有 水 博

(まえがき)

貿易会社、水産会社、外務省で22年間ポルトガル・ブラジル関係の仕事をしてきた筆者が、新設3年目のポルトガル語科の教師に転身し、最初の一年間手探りで、いかに学生のボキャブラリーを増やすかを目標に、二・三試み、迷いあぐねた結果を以下のとおり報告し、諸先生方のアドバイスをお願いしたいと思う。

1. 教育目標

1.1. 学外から見た新卒

ここ十数年ポルトガル語を専攻する学生も増えたので、筆者がブラジルからきた政府の要人、議員団、報道人の企業訪問、観光等にお伴すると、ポルトガル語の若い通訳の人と同席する機会が多くなった。彼等は、社交的な対話の時は、前の世代より、良い発音でこなれたポ語を話す。これは最近の外国語教育の成果だと思う。だが、話題が実質的な事項に及ぶと、ボキャブラリー不足のためか、立ち往生してしまう。ボキャブラリーは、ある程度経験年数に応じて増えるものだから致し方ないといえるが、問題は、知らない単語を他の言葉でいにかえるパラフレイズができない点にある。

この直接の原因としては、ポ・ポ辞典を使っていないことがあげられようが、更にその背景として、近年の「話す」ことを重視する語学教育のためか、読書量が決定的に不足していることが、その原因となっているといえないであろうか。

1.2. ポルトガル語専攻の学生が置かれる特殊環境

ブラジルには、約80万人といわれる海外で最大の在留邦人・日系人の集団があり、二・三世になると日本語との縁が薄くなってくるとはいえ、これらの人々は多かれ少かれバイリンガルな体験を日常的に強いられている。両国語を読み・書き・話す・ことが、ひととおりでできる人となると、その割合は急に低くなるが、なにしろ母体となる集団が大きいので、時には極めて高度なバイリンガルに出会うことがある。

日本からブラジルに進出している企業は、約500社にも達するが、これらの企業は渉外業務のため、日本語を話せる二世か、あるいは日本で初・中等教育を受けた後、親に伴われて移住し、

ブラジルの夜間高校・大学を出た人達を現地で採用している。

日本でポルトガル語を専攻する学生のうち、かなり多数の者が卒業後、本社からの出向・派遣社員として、これらの進出企業で働くことになるが、現地採用の人達は、待遇の格差もあり、一般に本社派遣社員に対し冷たい批判の目を向けることが多い。二世の場合、大多数は漢字が読めず、日本の事情にも、うといため、本社派遣社員とお互いに足りないところを補って平和共存できる余地もあるが、日本で中等以上の教育を受けてから移住し、現地でポ語を学んだ人達は、本社派遣社員のうち、特にポルトガル語専攻の社員に対し、特別きびしい評価をくだす傾向があり、これが世評となって定着してしまう。

従って当学科における教育目標も、なるべく短期間で、かなり高い言語の運用力を養成することを目指さざるを得ないと思う。なお、企業側は学校教育にそれ程多くを期待していないようなので、この目標は、企業に奉仕する産学協同を超えたところを、ねらいとしているつもりである。

1.3. 具体的目標

(イ) 後期の2年間は、専攻科目も選択制になり、言語、文学、文化等専門化が始まるので、3年生以降はどうしても、ポ・ポ辞典を使わなければならなくなる(英・仏・独等とは異なり、ポ語の場合簡易なポ・和辞書しかなく、これで文学作品を訳したり、法律・経済の資料を読むには無理がある)。

(ロ) ポ・ポ辞典を使うには、少くとも4～5千のボキャブラリーを必要とするので、前期の2年間で、これを習得する必要がある。

わが国の学習指導要領によれば、中学・高校6年間の英語学習で、4,700語程度の習得を目安にしているようなので、専攻となればこれを2年間で達成することを目標とすべきであろう。

(ハ) このためには、一頁でも多くポ語を読む必要がある。筆者は、主として各学年の講読の授業を担当しているので、内容的には大学生の知的関心を引くように、あまり幼稚なものではなく、しかも文体が平易な現代文を教材に使い、一頁でも多く読ませることを心掛けた。

2. 現状と方法論

2.1. 学生の現状

当初、一番とまどったのは、女子学生が半分もいるという事実であった。我々の学生時代は、ポルトガル語科には、一年置きに1～2名の女子学生がいるだけだったので、女子学生がどうして最近になってポ語に関心を持ち出し、いかなる目的でポ語を学ぼうとしているのか見当がつかなかったからである。いろいろ尋ねてみると、今のところ特に明確な目的意識がある訳ではなく、やはり女性の一般的な社会進出現象の一部のようである。従って教材の選定等においても、特別の考慮は払わないことにした。

4月後半より、5、6月と2ヶ月半授業をしてみて感じたことは、まず第一に、頭の良い学生

がそろっているということであった。教師に対する質問も鋭く、こちらが気付かなかった点を指摘され、教えられることもあったが、質問に真剣に答えて行くと、次第に質問が微に入り、細にわたり、そのような委細にこだわるのが、どんな意味があるのか判らないところまで達してしまう。問題なのは、このため90分授業で、わずか3～4パラグラフしか読み進めないことであった。これでは、いわゆる教養のための第二外国語風になってしまい、実用はおろか、2年間で4～5,000の基本ボキャブラリー習得も無理と思われた。また、一部の学生が、簡易なポ・和辞書の訳語を金料玉条の如くに考え、木に竹をついだような訳をするのをみて、早くポ・ポ辞典を使わせねばという感を深くすると同時に、このように細部にこだわるのは、減点主義による受験英語のせいではないかと、つい考えてしまう。

そこで、なんとかして学生の新鮮な知的関心を、外の広い世界に向わせる方法はないかと考えあぐねていた時、ちょうど新入りの先生を歓迎する懇談会を有志の先生方が開いてくださったので、先輩の諸先生方の御意見を伺ったところ、二・三の貴重な示唆をいただいた。そのひとつは、なるべく学生にものを書かせ、書くことを通じ、考えさせるというものである。

2.2. 方法論

(イ) 早速、2年生22名を対象に、今後いかにポルトガル語を習得するつもりか、各自の方法論を書かせてみることにした。

結果は大別して次の三つのグループに分けられる。

(i) 精読一辺倒派 8名

文法書を繰り返し精読し、基礎単語集による暗記をする。講読の授業の時も、予習として、全文和訳をあらかじめ作って行くので予習・復習に時間をとられ、学校のテキスト以外にポ語の本を読む余裕がない。少しでも疑問があると、そこから先へ進めない(原文のまま。8名中4名が同趣旨のことを述べているが、講読の授業の予習として全文和訳をつくってくる学生が4名もいるとは意外であった。このためか、簡易なポ・和辞書の訳語が、うまく当てはまらない場合、筆者が、ポ・ポ辞典を参照し、「その言葉は……という感じ」というような説明のしかたをすると、ちゃんと和訳を示せという要望が出た)。

(ii) 多読重視派 6名(精読を併行して行うという者1名を含む)。

読書が好きで、英語で書かれた本は既に何冊か読んでいるが、日本においては、ポルトガル語で書かれた適当な本を入手するのが極めて難しい。

(iii) 会話重点派 5名

L.L.を中心に、会話の本を読み、ブラジル人と話ができるようになりたい。

(なお、ポルトガル語を専攻することに迷いを感じ、勉強に身が入らないという者が2名いた。)

(ロ) 以上の結果を学生にも発表し、それぞれの方法論について詳しくコメントしたが、要旨は次のとおりである。

(i) (対・精読一辺倒派)

自分の性格に合った勉強法を取らざるを得ないと思うが、外国語を習得するには、あまり完全欲が強いと、袋小路に迷い込んでしまう。たとえば、文学作品を翻訳する時、いくら言語的に細かく分析してみても、必ず不分明のところは残るし、むしろ相手国の風俗・習慣・歴史・地理等言語外の知識が不足すると、とんでもない珍訳をするので、多読は不可欠である。文法書も多読と併行して年一回位目を通す方が効果的。

(ii) (対・多読重視派)

多読をしても、なかなかボ語が身につけていくという確かな実感が持てないという不安感を訴えた学生がいるが、最初の1～2年は、どうしても知らない単語が多く、辞書を引く回数が多いので、1日に3～4頁しか読めない場合もあり、あまり効果が感じられないかも知れない。しかし1日10～20頁以上読めるようになり、これを6ヶ月位続けると効果が上がったという実感が持てるようになる。最初は、あまりページ数にこだわらず、内容に興味を持てる本を探し出し、ひたすら辞書を引いて、おおよその意味を取る以外にない(コウルマン式の直読正解が目標)。少ししか読めないうちは、既に読んだところを、2～3回音読すると読書量の不足を補う効果がある。

(iii) (対・会話重点派)

我々の学生時代は、リンガフォンぐらいしかなく、頭が固くなってしまってから pattern practice による L.L. をやってみたためか、退屈で長続きしなかった。近年音声言語が特に重視されているようであるが、専門家は別として、外国語を異国人間の理解の道具として習得しようとする大学生の場合、むしろ文字言語に重点を置くべきではないか。外国人と話し合う場合も、発音とか、話し言葉らしい言いまわしに力を入れるのも結構であるが、より基本的には、伝えたい概念を、いかに正確・簡潔に表現するかに留意すべきである。ネイティブ・スピーカーでない場合、その話す外国語が、若干文語的な部分があっても、伝えたい内容が、より詳細・適格に表現されていれば良いと思う(ボ語の場合、多大な努力を費して、こなれたボ語を話しても、ブラジルではうまくいって二世に間違えられるだけであるが、かえって文語的表現をすると、どこでボ語を習ったのかと尋ねられ、日本の大学で勉強したなどと答えると相当の敬意と好意を示してくれるという功利的事情もある)。このためには、文法書から短かい例文を100～150例集めて分類し、これに類似の例文を、雑誌から集めてきて、計500題位、日本文と対照しながら暗誦するのが、一番手っとり早い(モデル・佐々木高政著“和文英訳の修業”)。会話の本は一冊に紋切り、何回も音読すれば良く、漫然と何冊もの会話書をわたり歩いて現実の生活では、本に出てくるのと同じシチュエーションというのは意外に少ないので効果が薄く、かえって短文を暗誦の方が、応用範囲が広い。日本語を介さない L.L. の場合は、母国語との比較という知的刺激がないので退屈なのではないか。また、最新の L.L. で訓練された学生が、例えば客員教授の講演等を聞くと、話している単語のひとつひとつは聞きとれるのだが、全体として何をいわんとしているのか判らない(概念がつかめない)という訴えをきくが、これは、acoustic image と concept を結び付け

るには、かなりなヒアリングの練習が必要だからだという人もいるが、むしろ遅いスピードで精読しかできないクセが付き、多読していないと、素早い concept の形成ができず、話しについて行けなくなることが原因だと思う。

通訳は、会話とは違う要素が入ってくるが、筆者が外務省で要人の通訳をしなければならなかった時は、いつも高度のバイリンガルの影におびえて不安になり（この数年間で最も緊張したのは、ブラジリアで初めての日伯閣僚会議が開かれた時、現地の日語新聞の記者を含め 100 名以上の報道陣が集まった共同記者会見で、通産、農林両大臣の通訳を 1 時間やった時であった）、この不安を払いのけるため、通訳をすることが決まった必ずその日から、Almanaque（国際情勢から経済、科学技術、文化、スポーツ等を網羅した時事年鑑の如きもの）を、毎晩眠る前に 30 分、通訳をする当日の朝に 30 分音読していたが、これは、それ程無理な努力を要せずに、相当の効果が上る方法と思う。

3 二・三の試み

3.1. 最初のボキャブラリー・テスト

7 月 2 日、学生の今までの読書量を推定し、また、今後一年間で、どの位ボキャブラリーが増えるかを調べるため、ポルトガル語を習い始めて 15 ヶ月目の 2 年生 22 名を対象に、予告なしでボキャブラリー・テストを行った。ポルトガル語の場合、英語の Thorndike のような組織的調査による Vocabulary selection がないので、簡便な方法として、大学書林「ポルトガル語常用 6000 語」より、不作為に、100 語を抽出し、無記名によるペーパーテストを行った。結果は、次のとおりである。

最	高	71 (100語中71語)
最	低	25
平	均	37.72

平均点は、だいたい予想どおりであったが、最高の 71 点というのには感心した。この高得点を上げた学生は、他の学生と同じ時期にポ語を習い始め、今まで特別有利な環境で勉強してきた訳ではない。同人によれば、最近 9 ヶ月の間に、3 冊のポ語の小説を読んだ由であるが、同人のボキャブラリーは、おそらく、4,000 語以上と思われたので、2 年生の終りまでに、クラスの 6 ～ 7 割の学生が、この線まで達成できれば理想的と考えた。なお、2 位以上の得点は、55, 51, 44, 42, 42, 41...であり、100 の単語に対する回答分布率は、次のとおりである。

22 名中	15 名以上が正解の語	23 語
// 10 ～ 14 名	//	14
// 5 ～ 9	//	19

// 1～4 //	27
正 解 ナ シ	17
計	100

(なお、正解ナシの語は、名詞11 (うち抽象名詞3),
動詞5, 形容詞1)

3.2. 夏休み中の新聞要訳

(イ) ポルトガル語界の最長老H教授は、我々の学生時代、口ぐせのように、「お百姓さんが田んぼを耕やすごとく、毎日字引を引け」、「語学は習慣だから、一度も欠席しなかった学生には、無条件で優をやる。たとえ親が亡くなった場合でも (あるいは、親が亡くなった場合は除きだったかも知れない)、一回欠席する度毎に学期末試験の得点から数点減点する」とおっしゃられた。この方針にのっとったのか当時H助教授は、夏休みの宿題として、教材として使っていたテキスト (ポルトガルの近代小説の原書) のうち約200頁を読むことを課し、夏休みが明けるとすぐ試験をされた。我々は、大学生になっても宿題かとボヤいたが、200頁位読んだ直後は、かなり進歩したような気がしたものである。

そこで、2年生各人に、ブラジルで発行された新聞1日分を配布し、夏休み中に、隅から隅まで読ませることにした。夏休みに入る最後の授業の時、NHKの国際放送の友人からもらった2～3ヶ月前の古い新聞を各人に配ると、しばらくザワメキが止まず、いかにポ語の読物が不足しているかを痛感する。学生には、細部にこだわらず、判らないところはとぼして良いから、一応全紙面に目をとおし、その中から興味を引いた記事を選び、全訳ではなく、いわゆる「いつ、どこで、だれが、なんのために、なにを、どうしたか」を400字詰原稿用紙に書き出し、これが20枚に達するまで、記事を捨ろえという課題にした。配布した新聞は、ブラジルの代表な日刊紙「O Jornal do Brasil」と「O Estado de São Paulo」であるが、1日分が、26～38頁もあるので、広告・写真の部分を除いても、8万語から12万語はあると思う。

学生が選び要訳した記事の内容は、次のとおりである。

1. 外 電	96	7. 科 学	4
2. ブラジル経済	40	8. 三面 (犯罪等)	42
3. // 内政	33	9. 広 告	114
4. 文化 (映画・演劇・書評等)	34	10. 気 象	16
5. スポーツ	35	11. 星占い	6
6. 社会 (福祉・教育・環境等)	30	12. マンガ	2

記事の骨子のみを要訳するようにとの課題であったが、約半数の学生は、ほぼ全訳に近い訳をし、400字詰の原稿用紙20枚で、3～8の記事を取り上げたに過ぎなかった。記事の総数は452件

で、1人当たり20の記事を要訳したことになるが、これは広告1件をひとつの記事として計算したためである。種々の記事の中では、ブラジルの内政に関する記事の要訳のうち、意味をなさないものが、かなり見受けられた。一般に男子学生の方が、大意をつかんで、ツジツマを合わせているのに対し、女子学生の要訳の中に直訳調で、意味不明のものが、少し多かった感がある。

(ロ) 第2回目のボキャブラリー・テスト (9月10日)

夏休み中に、新聞を読んだことが、ボキャブラリーの上に、どのような影響を及ぼしたか調べるため、9月10日、前回と同じ方法でテストしてみた。平均的学生の今までの読書量から推定すれば、もし新聞1日分を隅から隅まで読めば、8万～12万語(1頁300語の単行本に換算すれば260～400頁分)を読んだことになるので、少しは効果が出ることを期待したが、結果は次のとおりであった。

最	高	68
最	低	28
平	均	36.38

テスト人員 18名

18名中	15名以上が正解の語	18語
//	10～14名 //	15
//	5～9名 //	12
//	1～4名 //	31
正 解 ナ シ		24
計		100

(ゼロ回答24語中、動詞9、抽象名詞6、形容詞3等)

全般的には、前回とほぼ同じ結果であり、新聞を読んだことが、効果がなかったようで残念であった。ただ、正解率の分布を前回と比べると、15名以上正解の語が、23から18へ、5～9名正解が19から12へと減り、逆に、正解ナシが17から24となっているので、問題が難かしかったと仮定すると、平均点を、4～5点は上向きに修正しても良いのではないかと思う。

3.3. 課外・輪読の試み (11月～1月)

(イ) 講読の授業は、どうしても精読となり、一回に4～5パラグラフしか進めないの、これを補うため、2年生を対象に、多読を目標として、課外の輪読を計画した。これは前に学生各自に勉強の方法論を書かせた際(前出2.2.(iii))、多読はしたいが、適当な本を入手することが難しいという訴えがあったことを考慮したものである(当学科は新設のため図書館の蔵書も稀少)。

まず、筆者が3年前サンパウロで一番しにせの本屋の番頭と相談して買い入れたブラジルの現代作家の小説(すべて何回か版を重ねたもので、特定の読書層を対象とするものを除いた)を1

人に1冊ずつ貸出し、その2週間後に4～5人で1グループをつくり、各グループ毎に1冊の小説を選ばせて、これをグループ内で輪読するという方法を取った。つまり4～5週に1回自分の番がまわってきた時、前の人に続いて一週間の間になるべく沢山読むことを課題とした訳である。11月より、週1回90分の講読の授業のうち30分程度を割き、その週に当番に当たった学生5名（22名を5グループに分けた）に、それぞれ読んだページ数、その概要を発表させ、更に各人が読んだ部分のうち、最も印象に残った2～3行の短文を、暗誦用の短文として黒板に書かせた。結果は別表のとおりである。

輪読に用いた小説は、それぞれ学生が選んだものであるが、読む早さは、本の内容によって異なるというほかに、個々に検討すると、やはり精読一辺倒の学生は細部にこだわって読みが遅いようである（かといって、発表の内容からみると読みが深いとは思われない）。

自分の番がまわってきた一週間の間に、実際に読んだのは、2～3日、1日2～3時間というのが、平均像のようであるが、最も多く読んだ学生が24頁、最低3頁、平均10頁となっている。グループ分けして輪読させた目的は、他のグループと張り合えば、読むハズミが付くと考えたからであるが、かえて他のグループと読む速度の歩調を合わせる結果となった。しかし、あとになるにつれて、沢山読む学生が出はじめている。

（ロ） 3回目のボキャブラリー・テスト（2月4日）

輪読した期間が短かったので（また当番に当たった学生が欠席したりして、発表は3回の授業につき2回位の割合となり、結局1人が一回ずつ、発表しただけに終わった）、この点では、ボキャブラリー・テストをしても、さしたる意味はないと思ったが、学年末に締めくくりの意味で、前回と同様のテストをしてみた。結果は次のとおりである。

最	高	66
最	低	22
平	均	37.64

22名中	15名以上が正解の語	25語
//	10～14名 //	16
//	5～9名 //	14
//	1～4名 //	20
正 解 ナ シ		25
計		100

（正解ナシのうち動詞11、抽象名詞6、形容詞5等）

このテストにおいても、学生のボキャブラリーが増えたようには見えないので落胆したが、最高、最低が共に前回に比べて低いにもかかわらず、平均点が上っているので全体のレベルは、

少しではあるが向上したといえないであろうか。

ちなみに最高点の学生（常に同一人物）と2位以下6位までの点差を取れば次のようになる。

	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位
第 1 回目のテスト	−16	−20	−27	−29	−30
第 2 回目 //	−20	−25	−25	−26	−27
第 3 回目 //	−18	−19	−22	−22	−25

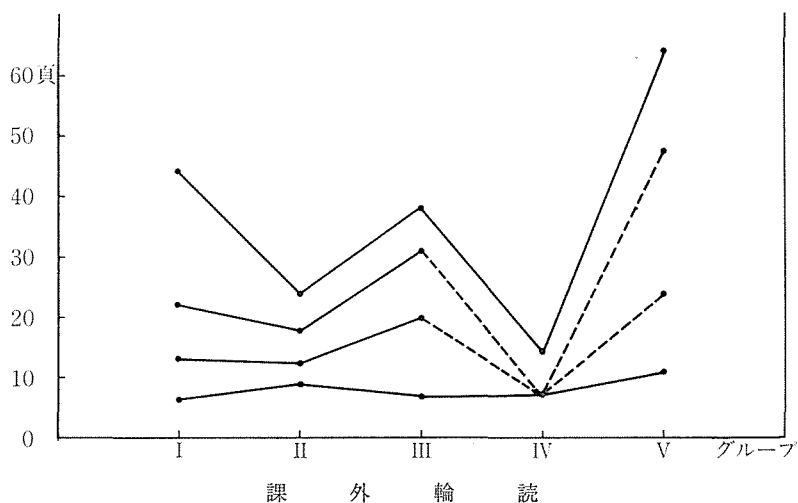
これらのテストには、一貫して、前述の「ポルトガル語常用6000語」を用いたが、Vocabulary selection をする場合、最も基本的な 1000 語程度については、どのような資料から選んでも一致するが、それ以上の単語については、資料（選者）によって異なってくるといわれるので、このテストの方法そのものにも問題があるのは、承知しているが、簡便な方法として、とりあえず試みた次第である。

ただ、大局的に見て、学生に多読の必要性、ボキャブラリーの拡大を訴えたが（平素の講読の授業中でも、テキストに出てくる語の関連語を思い付くまま黒板に書いたが、学生はあまり関心を示さなかった）、あまり効果がなかったようで、教育というものは一朝一夕では効果があがらないということを思い知らされた感がある。

3.4. 今後の方向

つき離して考えると、外国語を学ぶ際、きちようめんで細部にこだわり、なにか緊張して身構えるという姿勢は、日本人一般に共通する性格のようなので、学校教育においては、かえてこの特性を利用して基礎をつくり、実社会に出てから必要性に迫られて拡大して行けば良いのかも知れない。ただ益々変化のスピードが早くなって行く現代社会・国際社会の中で、社会に出てからそれに対応できない卒業生が増えて行くのに対し、学校教育も変化が必要なのではないだろうか。

やはり学生に多読をすすめる中で、障害を感じたのは、適当なテキストが無いということであった。今年一年効果があがらなかったのも、副教材に使った新聞、現代小説が、ポ語を学び始めて2年目の学生にとっては、難し過ぎたと反省している。一般に特殊語学の教材は、市場が狭いめ、各種学校の生徒・短期講習会の生徒等も対象にされ、いわゆる教養のための第2外国語風の薄手（50～60頁）のものしかないが、これとてポ語の場合はほんの数種類しかない。多読を組織的に進めるには、除々にボキャブラリーが増えて行くように配列された400～500頁の読本（学生が一授業時間当り20頁位をあらかじめ読んでくれるもの）を、非商業ベースで編さんしなければならないと思う。



- I. Jose J. Veige 著 “Sombras de Reis Barbudos”
 (地方都市に住む少年が成人するにつれて見えてくる周辺の人物の葛藤を描いたもの)
- II. Lúgia Fagundes Teles 著 “Ciranda de Pedra”
 (三人姉妹の末娘の姉に対するコンプレックス、母の愛人に対するにくしみを描いたもの)
- III. Clarice Lispector 著 “Laços de Família”
 (女流作家の短篇集、日常生活の中にかいま見る不条理を追求)
- IV. Jorge Amado 著 “Mar Morto”
 (ブラジルで最も売れている作家、東北部の海岸地帯に住む人々の生活を題材に)
- V. Jose Moura de Vasconcelos 著 “O Meu pé de laranja Lima”
 (童話風のタッチで、少年の目から見た田舎町の日常を描いたもの)
- (第IVグループは、二番目の読み手の学生が、欠席していたため停滞)

